

までも、以前の遺名にて江戸町御亭など、唱へ、押立て、蓮池御殿などとは不稱跡也。されば御殿と唱ふるは、是より後の事なるべし。改めて御殿と稱し、又後に御用に無之たゝませらるといふ事は、舊記に見當らず。今の御亭共は、皆寶曆の火災後の建物なりと云々。平次按するに、延寶四年九月に御座敷造營とあるを、蓮池亭の起本といふは非なり。寛文年中既に蓮池亭のありしこと、田邊政巳筆記にて知られけり。又文政二年に藩主十二世權中將齊廣君、蓮池と呼べる濫觴等を穿鑿せらるゝに付き、富田景周より書き上げたる考説左の如し。

蓮池考

蓮池は、古來よりの名に非ず。御墅の名に蓮池あり。その邊りにある地なる故、後人蓮池と音にて唱へ、蓮池とその名を分つよしなり。蓮池の名は、極樂橋などいふ類にて、そのいにしへ本源寺尾山在城の頃よりの名なり。其の頃は、今のやうに水なく、からぼり也。寛永九年に微妙公辰巳の水道御開通より水墅となるよし、關屋政春の古兵談に記せり。此の蓮池の地は、天徳夫人御入興以後、江戸町と

て關東より御附の人々の小屋、此所にあり。又古圖に此所に作事場と記せるは、御年譜等に、萬治二年七月作事所を改め建つと載するものにして、即ち故作事の遺跡是なり。又菅家見聞集に、萬治二年七月、御作事所を奥村河内榮清が門前の明地に建てさせらるとあるも、是と同所なり。是は此の時の河内居宅いまだ今の學校の地にありし時の事なり。此の地を退くは、元祿九年にあり。按するに、此の作事所出來の頃は、最早關東よりの御附小屋も御取拂ひ後の故なるべし。蓮池御殿は、延寶四年九月の舊跡に、故作事所に御座敷建てさせらる。其の時の奉行金子安左衛門・中村兵左衛門とあり。按するに今の御作事所の地、御作事所となるは、此の時に御座敷御造營に付、轉地仰せ付けらると思はるゝ也。是即ち此の蓮池に御造營ある起本にして、是を後に御殿とも稱せし成るべし。其の頃は、いまだ何事も質素の時節ゆゑ、御座敷とは唱へ、また貞享の頃までも、以前の遺名に而江戸町御亭など、唱へ、押立て蓮池御殿などゝは稱せざる跡なり。されば御殿と唱ふるは、是より後の事なるべし。改めて御殿と稱し、後に御用に無之た

ゝませらるといふ事は、舊記にも見當らず。今の御亭どもは、皆々寶曆の火災後の御建物なりといへり。貞享三年八月十五日に、御拜領の駿足をば蓮池の御亭にて大老以下の人々へ見物仰せ付けられ、且御拳の鷹の雁を賜食仰付らるゝ事、年表に見えたり。一舊記に、此の日既に夜に入り、大夫以下風雅の輩に命じて、明月の詩歌を獻せさせられ、奥村庸禮父子の詩歌を公賞し給ふとあり。しかれば蓮池の御馬場も既に其の頃ありしと思はるゝなり。元祿九年八月十一日に松雲公江戸より御歸藩、直に蓮池の御殿へ御着駕あらせられ、年寄中と御商議ありて、同十七日に、三州今年大飢饉なるゆゑに、倉廩を盡く開かせられて窮民を賑給せらる。此の事の詳細は、年表等の諸書に載せたり。此の時此の御殿へ御着駕あるは、元祿七年六月より金城二ヶ丸御造營あるを以てなり。此の御造營は大なる事にて、同年落成、二ヶ丸へ御移徙なり。按するに、是までは今の學校の地に横山山城・奥村河内・横山右近の三屋敷あり。此の屋敷ども、今年御所望にて轉地仰付らる。是蓮池御殿の御用屋敷と成りたるものと察せらるゝなり。同十年五月三日

に、此の御亭にて御射手十九人に的矢を命ぜられ、御覽あり。その姓名等は爰に略す。此の度延享四年十月十日に、謙徳公此の亭において、年寄衆横山貴林・本多政昌・前田直躬・奥村修古の四人に紅葉見物仰付けられ、嘉三郎君御詠歌遊ばされ、年寄衆は詩歌を奉れり。同月十三日十九日も、追々見物仰付けられたり。是より後年にも折々此の事ありといへども今こゝに略しぬ。

卯月晦日

富田痴龍翁考

按するに、右は文政二己卯年也。富田氏は文政元年十二月廿七日、七十三歳にて致仕、痴龍翁と稱し、養老料五百石を賜はり、翌二年は七十四歳なり。

○蓮池居館

松雲公年譜に云ふ。元祿九年七月廿九日江戸發駕、八月十一日歸城、直に城外蓮池御殿へ被爲入。此の歳夏秋之間大に飢饉、諸士粥を食す。加越能三州每郡に役人二人宛被遣、窮民へ衣食を賜ふなり。且今年宰相公歸城之當日より、蓮池御殿に居住被成。御保養之爲なりと見ゆ、改作所舊記に、元祿八年凶作に依つて、翌九年飢人甚だ多く有之、